

長崎 ロボット開発拠点に

長崎 ひとだより

水槽の中を悠然と泳ぐ
イ。本物のようだが、実は
ロボットだ。



これまで開発した魚ロボ
トは16種類。尾ひれのよう
な動きを推進力に変える「弾
性振動翼推進システム」を開
発した。医療や宇宙など様
々な分野に応用するロボ工
学の第一人者だが、「最近
は魚ロボットの人の言われ
る」と

長崎大大学院工学研究科

山本郁夫教授 54 (長崎市)

笑う。

福岡市出身。幼い頃に過
したカナダ・オタワでテレビ
番組「サンダーバード」を見
て、特徴的な可変翼や大型航
空機に心を奪われた。揚力へ
の興味は強く、子どもの頃か
らロボットを自作していたと
いう。

九州大工学部航空工学科に
進学し、大学院を経て三菱重
工業に入社した。旅客機B7
87の主翼やリジショナルジ
ェットの研究、潜水探査機「か
いこう」の開発に従事。20
04年からは海洋研究開発機
構に在籍し、自律型無人探査
機「うらしま」が317機の
連続航走世界新記録を樹立し
た際の責任者を務めるなど、
いくつもの実績を上げた。

企業や国の研究機関では依
頼主のニーズに応えるという
目標に向かってシステムを構
築する。社会的な意義を感じ
る一方、開発途中で生まれる
新しい発想に挑戦する機会は
限られた。時間を見つけて取
り組んだ研究論文が評価さ
れ、不特定のニーズに応えら
れる研究にも魅力を感じた。
05年に大学教授に転身、13年
に長崎大に着任してからは、
「長崎をロボット開発の拠点
にしたい」と意気込む。

海に囲まれた長崎の地理的
特徴を生かし、波力や潮力、
洋上風力による再生可能エネ
ルギーの開発や、海洋資源探
査、魚の養殖などにも、これ
まで開発したロボットを応用
できるよう計画を練ってい
る。「宇宙や海洋、医療など極
限の環境を支え、日本が豊か
になるような技術を開発でき
る人材育成に取り組みたい」
と力を込める。(遠藤信葉)